

1. 報 告

農業振興による村づくり

矢 幡 欣 治

1. 「梅栗運動」を振り返って

大山町は、大分県の北西にある田舎の村でして、隣はもう熊本県です。またすぐ隣が福岡県で、大分県と熊本県と福岡県との県境にある農山村です。国道まで杉の美林が迫っていきまして、土地柄は急傾斜地帯、非常に急峻なところなんです。もともと農業には全く適さない場所柄であります。

以前から過疎が大きな問題になっていましたが、私の村も例外ではありません。若い人たちがどんどん東京や大阪や名古屋に出ていくということで、村そのものが崩壊してしまうような時期でした。そのとき（昭和36年）に約1,100戸の総世帯数があったのですが、約7割の方が農林業に携わっておりました。この農林業の対策をしないと、うちの町は存立し得ないわけですが、かといって農家の方は、収入源としてどんな農産物をやるのかと言ったら、当時はほとんどめぼしい作物はありませんでした。

農家の人の収入源になるような作物を何か取り入れなければ、うちの町はダメだということで、梅と栗で村づくりをスタートしたので昭和36年、今から28年前でございます。

約30年にわたりまして、一貫して村づくりを進めてきて、何か効果があったのかなと今振り返るわけであります。私の町は1市1町3カ村が取り囲んでおりますけれども、ひどいところになりますと、昭和30年代の人口の2割ぐらいに減ってしまった村があります。その中で、うちの町だけは、過去15年間、3回の国勢調査によると毎回人口がふえてまいりました。小学校の児童数が年々ふえ

てくるといいますか、若い人たちがかなり住みついた町に変わったなという気がいたします。

私は昭和38年に東京の大学を卒業して田舎に帰ってきたんですが、父が村長で村づくりの旗振りをやっております、「おまえも長男だから、加勢をせい」ということになりまして、私も役場に8年間勤務して、主に産業基盤の確立のためのお手伝いをさせていただきました。当時は産業振興に対しては、大変な力の入れ方でした、昭和36、37、38の3カ年、町の予算の3分の1を産業育成費に投入してしまうという思い切った行政を展開いたしました。私は、その最終年度の年に田舎に帰った訳ですが、当時、私の町には、大学を卒業して町役場に勤めるような人はほかにおりませんで、私もかなり生意気な気持ちで役所に入ってまいりました。ところが、まず一番に驚きましたのは、職員の皆さんは大変字が上手、計算が速い、そして文章力もあるということです。そのときは、すごいなと思い知らされました。二番目に驚いたのは、何とまあ、みんなよく仕事をするのだろうと思ったことです。毎晩10時、11時まで、残業していきまして、土曜日でも日曜日でも出てきて仕事をする。また、農協さんの方も同じようでした、農協、役場、県の出先の改良普及所、この3つが、本当にみんな朝から夜遅くまで、寝食を忘れて仕事に取り組むというぐらい燃えておりました。私もそういう環境の中で、だんだん田舎の生活が身についてきまして、行政の立場から、いろいろ町を眺める機会をいただきました。

その過程の中で、私が非常に心配したこと

は、村民の所得基盤をしっかりとつくらなければならないということでした。では、何がうちの町に向いているのか。いろんな検討をした結果、梅と栗で果樹の町づくりを進めようということになりました。そこであらゆる援助の手だてを行政、あるいは農協、改良普及所がやってきたわけですが、その運動の過程の中で、私は、えも言われぬ不安を感じました。行政の力というのは実に偉大で、お金もかなりのことができますし、人間的ないろんなソフトの援助もできます。いろんなことができるわけですが、それができればできるほど、私は、限界があるような気がしてなりません。余りにも至れり尽くせりの手当てをしますと、その分、農家の方々は、それに寄りかかってしまうといえますか、本当の産業が地につくためには、もっともっと下から盛り上がったような力で、地域産業というのは育成すべきじゃないかというのが私の考えでした。

それから30年近くの歳月が流れたわけですが、実はこれは、私たちがやったわけじゃありませんけれども、その運動の中で非常に大きな意味合いがあったと思うのは、ただ物づくりだけでなく、地域の農家の方々を中心にした若い男の方々、女性の方々の教育の場を提供できたことだと思っています。その当手を振り返ってみまして、休みもなし、サラリーも、大分県の88市町村ある中で、うちの町の役場のサラリーは県下最低でして、また、農協の職員の方々も県下最低でした。

ただ、農家の方々が、所得を上げて、大分県一の、あるいは九州一の所得を上げるような農家になったら、我々もそれに見合うだけのサラリーをいただくんじゃないかという夢を持って仕事をさせていただきました。その夢がある間は、私たちは、全然苦痛にも何も思いません、バラ色の人生が待っているような空気が、町じゅうにみなぎってありまし

た。

2. 梅栗植えてハワイへ

実際、運動を展開してやっておりますと、いろんなトラブルがついて回りまして、なかなか思うように成果が上がりません。昭和30年代から40年代にかけて、日本の経済の大成長期でございまして、所得倍増、我々の周りの環境は、大変な変化を遂げていったわけです。

ただ、その中で我々は、無力さもちろん感じたわけですが、その反面、農村にいて、都会の人ができないようなことをたくさんやっていこうじゃないかという気持ちを持ちました。昭和40年、運動が始まって4年目、まだ梅栗運動の実績も何にも上がっていないときに、何と農家の方々のハワイ旅行を農協で提唱いたしまして、農家の方々を強引に誘いまして、昭和40年、今から25年前に、農家の方々がハワイに旅をしました。

梅と栗でハワイに行ったということで、マスコミの方も大騒ぎいたしました。実際は梅と栗の収入だけで行ったわけじゃありませんでしたけれども、非常にマスコミをにぎわしました。

翌年もまたマスコミの方が押し付けてきまして、ことしもまたやるんでしょうということで、とうとうやめられなくなりました。いろんな町づくりで、行政主導とか民間主導とか言われますけれども、私の方のハワイ旅行はマスコミ主導でして、とうとう2回目もハワイ旅行を続けて、その後、シーズンになると、毎回マスコミの方がやってきますのでやめられなくなってまいりまして、10年たちましたら、これは何事も一つの伝統になってきました。とうとうあれから24、5年たちまして、4,500人のうちの町の人口の中で、毎年20人から50人の範囲で出かけたので、何と合計で1,000人を超えるような方たちが、ハワイに行っております。今年も、

もうすぐまた 4、50 人の方が、冬場の寒い時期にハワイに行く。それが当たり前の農村に変わってきたと感じております。

3. キブツに学ぶ

それともう一つ、昭和 44 年、私が役所にいるときですが、ある日突然、役場の職員二十数名が会議室に集められまして「この中の職員 2 名、農協の職員 1 名、計 3 名をイスラエルのキブツというところに派遣する」ということを村長から言い渡されました。「行政は、資金が乏しいもので、東京とイスラエルのテルアビブの往復の飛行機の切符だけ支給する。あとは自分たちで勉強して、キブツという農業集団の中で、向こうのいいところを学び取ってきてほしい」ということで、突然指名を受けまして、私も 3 名のうちの 1 名として参加をさせていただきました。

皆さん、イスラエルのキブツと言いますと、ソ連の集団農場のようなものだったか間違いないかと思えます。ただ、ノルマのない社会でございまして、私たちも 4 カ月間、その中で共同生活をしてまいりました。まだ我々は 30 歳前でして、そのキブツという共同生活を通じて、頭をぶん殴られるようなショックを受けました。

最初の 1 週間ぐらいは、嫌で嫌でしょうがありませんでした。ところが、生活になれて、彼らの懐に飛び込んでいきますと、ユダヤ人の合理的な物の考え方、組織の決定の仕方、組織のあり方、食生活、住宅、福祉、子供の教育、あるいは余暇の時間の使い方、住宅環境の整備、ありとあらゆる面で、私たちは頭をぶん殴られるようなショックを受けました。そして 3 人で毎晩、日本の明治維新は、こんなものじゃなかったのだろうかという感慨にふけたものです。

そのときに、向こうのトップの方々といういろいろ話が進みまして、うちの町と姉妹町の提携をしようじゃないか。お互いに若い人同士

を毎年交換して、地域の役に立つような青年を育てていこうじゃないかということになりました。実は姉妹町の調印まで、そのときにする運びになりました。以来 20 年、ずうっと向こうからも、長期間にわたって私共の方にやってきますし、うちの方も、毎年 2、3 名の青年を派遣してまいりました。

私たちは農村の代表として行かせていただいたのですが、私は、農業をする方たちが、農業の範囲で物を見たら、進歩がないんじゃないかという気がしてなりません。できたら農業以外のことを、そういう機会を利用してたくさん見てくる、体験してくるということが大事だろうと思ひまして、実はイスラエルの研修が終わった後、1 カ月時間をいただきまして、エジプトに行き、ヨーロッパの農山村を見て歩き、素敵な音楽を聞き、絵画を見、いろんな体験をして、帰ってまいりました。

ところが、田舎のことですので、非難ごうでございまして、その派遣事業も、姉妹町を結んだにもかかわらず、翌年から中止になってしまいました。私は帰って、我々の周りの青年の方に、我々が感激した、得たことをいろいろ話す機会をつくってまいりましたけれども、そのたびに何か非常にむなしいものを感じました。それは、おまえたちは、給料をもらいながら、そういうチャンスを得て、おれたちには、そういうチャンスはないという言外の気持ちを、そのときになんか痛切に感じました。3 人でいろいろ話をして、行政がお金を出してくれないということだけであきらめないで、僕らが得たそういうすごいショックを、うちの村の青年の方々にも体験してもらおう、そんな場づくりをしてあげることが、我々の地域に対するお返しじゃないかということで、意見が一致しました。3 人で運動を始めまして、3 カ月間かかって村の有志の方々を訪ねて、1 万円の基金を出してくれとお願いをしまして、とうとう昭和 47 年に

150万のお金を集めてしまいました。そのお金で3人の青年を、キブツに送り出しました。

その3人の青年には、うちは農村だから、農業のことを勉強してこいとは一切言いませんで、レポートを書く必要もない、自分の好きなことをやってきてほしい。イスラエルだけじゃなくて、アラブの国にもぜひ入ってほしい、ヨーロッパにも行ってほしい、最後は東南アジアの開発途上国を見て帰ってきてほしいということをお願いしまして、見送ったわけです。

全く英語も何もできない田舎の、学歴もない子供たちでしたけれども、4カ月後に板付の空港にたくましい顔をして帰ってまいりました。私たちは、それを迎え入れて、あしたから、また次の青年を出す基金集めをしようということで、3人が6人のメンバーになって、また次の青年を送り出すということをやってまいりました。メンバーが10人を超えてからは、私たちがいろんな事業をしながら、自分たちでお金を見つけて、青年を送り込んできました。メンバーが次から次にふえてまいりまして、今は50歳から20歳そこらまで、約60名の青年がうちの町にいます。

4. 新しい特産品を求めて

ここ15年ぐらい前から、うちの町が本当にさま変わりをしてきました。昭和36年に梅と栗で村づくりを始めたころは、農家の人は、もうだめだ、こんな田舎には住めない、などと泣き言ばかり言っていましたが、ここ15年ぐらい前から、いや、田舎に住んでいるということはすばらしいことだ、都会でできないことが、田舎でこれだけできるというように、村の人たちの意識がさま変わりをしてきたような気がいたします。

15、6年ぐらい前から、我々が派遣をしてきた青年の人たちが、うちの町の中で、あらゆる分野で活動を始めました。産業の育成ももちろんですが、自分たちの生活圏を充

実させるためのいろんな動きをしてきた。町が変わってしまったような気がいたします。

大山の農家の方々の1戸当たりの平均面積はわずか40アールです。1反で100万円の収入を上げましても400万円です。うちの町の場合は、土地利用型の農業ができるわけではありません。我々の先輩の世代は、果樹でうちの町の基盤をつくらうという運動を展開しました。その中で、我々は100%そのことを信じて動いてまいりました。

ところが、これは我々の世代で、もう1回掘り起こして、内部を見詰めて考え直さなきゃいけないんじゃないかということに気がついたので。1年に1作の果樹、あるいは米でもそうだと思いますが、こんなものは農家のボーナスにすぎません。じゃ、毎月のサラリーになるものはといたら、私どもの方は、土地利用型の農業ができるわけじゃありません。狭い農地ですので、まず一番に回転性があること、2番目に、天候に左右されないこと、3番目にどんな仕事をする場合でも、競争相手がありますので、その競争相手の地域に対して、自然条件においてまさるとも劣らないこと、あとは、人的な競争なら、我々が努力すればどんなことでもできる。4番目に、原材料を商社に押さえられていないものと、我々が勝手に整理をしまして、その観点で、実は日本じゅう、あるいは世界まで足を伸ばして見て回りました。

最終的には、我々の身の回りに、日本一条件がよく、当時は無料でしたオガクズに目を付けました。このオガクズを原材料として利用して、キノコづくりを始めようということで、実は私とその仕事に取り組みました。私は、役所にお世話になっているときに常々思っていたのですが、本当の地域の産業というのは、下から盛り上がってきて、本当の産業になれる。上から情報を提供することはできるけれども、それに食いつくのは、あるいはそれに食いついて行動を起こすのは、あくま

でも農家の方であります。上から与えられたものに関しては、うまくいかないときは、人のせいにします。ただ、農業以外の方々は、自分で事業を始めた方は、人のせいにするような人は一人もいません。私は、自分たちの力で事を興して、それがかなりの規模になったならば、自分たちで手に負えない分野、例えば選果場とか、あるいは車はどうするのかというような公的な仕事は、行政の力をおかりしなければいけない。しかし、あくまでも主体は自分たちで興さなければいけないということで、キノコ産業を自分でスタートいたしました。

1、2年軌道に乗らない間は、どなたも振り向きもしませんでしたけれども、どうにか軌道に乗り始めたら、周りの方が押しかけてまいりまして「私にもやらせてよ」。しかも「絶対損をしない方法でやらせてよ」。実に都合のいい申し出がありまして、私もメリット、デメリットを計算して、これはいずれにしても、産地形成をしないことには、競争に勝てないと思っておりましたので、周りの方に私のノーハウを教えることにしました。

その輪をだんだん大きくしていきまして、今は何と年間180戸の農家の方々が、キノコを主体にして、経済基盤を確立をしております。その間に、我々が海外に派遣した青年の方が、町の中でいろんな産業を続々と興すようになってまいりました。我々が、ここ14、5年で興した農業も、あるいは農外のことも合わせますと、毎年生産額が30億を超えるような産業になってまいりました。農村では、ちょっと一味違った町に変わったなという気がいたします。ただ、問題はこれからでして、余り過去のことを話すのは好きじゃないのですが、今、我々もまた新たな課題をたくさん持っております。

5. 農村の魅力を引き出す

かつて、昭和30年代から40年代の前半

にかけて、農村から都市へと若い人たちが随分出てまいりました。第1回の石油ショックの後には、Jターンとやらで、農村に若干は返ってきました。また、今まさに第3の流出といますか、ここ何年か前から、農村から若い人たちが、次から次に都市に流れていく。かつては、経済的な基盤がないから、若い人たちが農村に住めないということが、基本であったような気がいたします。

ただ、現状を見てみますと、今度のそれはそんな生易しいものではない。現に我々の地域で、今は就業の機会はいくらでもあります。うちの町ほど、求人倍率の高いところはありませんで、何とうちの町は、隣の日田市とか、隣の町から、バスで何人も仕事をする人を連れて来ておるような状況で、うちの町の今一番の大きな課題は、人手がないということです。

その中にありまして、次男とか三男とか、あるいは長男も含めて、どうもここ2、3年前から、うちの町からも若い人が出ていってしまうような流れに変わったなと思ってます。さて、これを解決しないことには、我々がせっかくつくった基盤が保てません。我々もあと20年もしたらリタイアをする時期に向かいます。せっかく自分たちで頑張ったものが、次の世代がしっかり受け継いでくれないことには、我々の人生は真っ暗でございます。さて、それをどうやっていこうかがこれからの課題です。

また将来、農産物の輸入の自由化が迫ってくるかと思いますが、私は、そんなことで日本の農村がつぶれるとは思っておりません。特に我々の地域は、そんなことで惑わされるような地域ではないと思っています。

もっと大きな問題は、これからのヨーロッパ、フランス、西ドイツ、あるいはアメリカ、イギリスのように、やはり労働時間の短縮は、避けて通れない大きな課題であろうと思います。今の若い人たちの動きを見ていますと、

お金がとれても嫌だ、もっと自分の自由な時間が欲しいというのが、一番大きな課題のように思います。

我々は、食えなかったときに、努力して食えるようにしてまいりました。その苦労の過程を知っておりますので、我々は今の状況に非常に満足しています。ただ、次の世代の子供たちは、今の生まれ育った環境が当たり前でして、もっともっと高い次元の生活のありようを考えています。それに対応できるような農村づくりをしないことには、農村が崩壊してしまうということを、私たちは感じております。

いつの時代でも、若い人たちに夢とロマンが持てるような農村でなければならぬ。それは、単に経済的な基盤のみならず、自分たちの周りの環境、人的な環境、自然環境、あるいはもっともっとライフスタイルそのもの、物づくりをする方々のライフスタイルそのものを、我々は次の世代の子供の前に、提案をしなければならないんじゃないかなと考えております。

あらゆる面から、高度な常識を身につけた農村の青年づくりをしなければいけないと思っています。付加価値の高いものをつくっていかなければ、僕らの地域は生活ができません。付加価値の高いものをつくらうと思えば、どんな日本じゅうの消費者の方々よりも、何歩も進んだような常識を身につけ、ノーハウを持った青年を地域に育てなければならぬと考えております。

○ 2点お伺いしたいのですが、今おっしゃった中で、農村では都会にない、いいものがあるんだ、それを生かしてやっていこうという話でした。それはどういうものだとお考えになるかというのが1点です。

第2点は、今後、若者にはもっと夢とロマンが持てるようなライフスタイルを提供していかなくてはならないということでしたが、

そのあたりをもう少し教えていただければと思います。

矢幅 1番目のよいもの、私たちは田舎に住んでおりますと、すてきな自然に恵まれております。すてきな自然は、すてきな緑であり、川であり、そういう自然環境は、私たちにとって本当にすばらしいものと思います。

私は、うちの地域の我々の目につく範囲の今の自然が最高にすてきと、お偉いさん方があいさつのときに言ったのを覚えていて、それを小さいときから信じてきました。ただ、今は、いろんな世界を私たちの目で見てきましたら、うちの地域は、人工造林ではきれいな森林かもしれないけれども、本当の自然、私たちの心を本当に和ませてくれるという自然から見たら、ほど遠いような気がいたします。

そういう意味では、私たちがもう1回自然とのかかわりの中で、どういうものが本当にすばらしいのか。これから50年、100年、200年のスパンで物事を考えるようないい時期に差ししかかったなと思っています。

今、日本の国内産の木材が非常に安くなりまして、森林を伐採した後、その跡地に植えつけをされないというところが、僕らの周りにも出てまいりました。今、逆に言えば、我々がすてきな自然を取り返すいいチャンスになったなと思っています。

2番目の夢とロマンの点ですが、私は、夢とロマンがあれば、一生、手元にお金がないまま過ごしても、人間は豊かな気持ちで生きていけると、ある面では思っています。所得が、お金がすべてでは決してありません、すてきな夢とロマンは、人間にとって一番大事な分野じゃないかなと思います。ただ、できたら、自分たちの手の届く範囲の夢とロマンも、常に持ちたいなと思っています。

私たちは、今こんな新しい取り組みをしております。通産省のシルバーコロンビア計画というのがありました。日本の高齢者の方々

をスペインだかどこかのところに行って、1年のうちに何カ月か年金で生活をしていくという計画でした。ところが、いろんな国々から、お年寄りまで輸出をするのかとって反発を買って、いつの間にか、あの計画がとぎれてしまいました。

私たちは、九州大分県の山奥にいまして、あの発想は非常におもしろい。地方の田舎のところがすることに関しては、何も問題はないんじゃないかということで、シルバーコロンビア計画が出ましたときから、実は我々はその目で外国を眺めてまいりました。気候のいいところ、今はマレーシアに目をつけているんですけども、時差が日本と1時間しかございません。九州から直行便で、クアラルンプールまで飛行機便があります。毎月の平均気温が27、8度で、一年じゅうコンスタントです。そこに、うちの町の高齢者の方々の冬場の避寒地をつくらうじゃないかということで、今その運動をやっている、あと1、2カ月もしたら形が見えてくるんじゃないかと思います。

私たちは山奥ですが、都会ではできないようなことが、我々の周りで何ぼでもできます。実は今、国際化、国際化と言われているけれども、我々は20年前からそんなことをやっています。九州大学に常時、400人の海外の留学生がおります。ドクターコースの方々もおりまして、ドクターコースの方々は、オックスフォード、ケンブリッジ、ハーバード、そういうところを出た方たちがたくさんおります。宝の山でございます。

その方たちと交流を深めまして、うちの町にしょっちゅう引っ張ってきて、中南米料理を僕らが食べたいと思ったら、向こうの中南米の女性の方を招いてきて、僕らが資材を提供して料理をしていただきます。僕らは、全員カップルで集まって、その料理に舌鼓を打つ。エスニックが食べたいと思ったら、そういう方々を呼んでくる。「おい、フランス

料理を食べたいな」と言ったら、僕らでホテルオークラへ行きまして、オークラのシェフを「田舎へ来て、うちの町でできる材料で、おはしで食べるフランス料理をやってくださいませんか」と言ったら、結構乗ってくれるんですね。いろんなことができます。

私は、都会よりも地方の方が、やりたいことがたくさんできるような気がしてなりません。僕は、村の人を誘って、年に5回から6回、外国に遊び歩いております。あと2日後から、実はメキシコに行つてまいります。2週間メキシコだけです。別に特別のことで何もありません、簡単なことです。14、5人集まったら、随分安く旅ができます。旅行社も一切通しません。自分たちで旅をつくります。

農協は、私たちがつくった農協ですから、利益が出るように、農協の組合員が、農協を最大限に利用しなければなりません。利益が出たならば、我々に返してもらわなきゃなりません。我々が遊ぶための、仕入れのためのお金、教育費という名目で、農協が金利2%で遊ぶためのお金を貸してくれるようにしてあります。月に1万円ずつ返していけば、4年間で借入れが終わる。ああ、メキシコへ行きましょう。月に1万円出さない人は、どなたもいらしゃいません。僕らのど田舎でございますが、世界じゅう遊び歩くことができます。

やっぱりそういう夢を、そして、いろんなすてきな物を見て、私は、うちの町が将来とも農業だけで食っていかなければならないとは思っておりません。いつかの時点で非常に知的な、付加価値の高い地域に、変化を遂げていってほしいと思っています。

そのためには、まず住んでいる方々が、そういう人たちになるような場づくりをしなければならぬと思っています。すてきなものを見たり、聞いたり、食べたりするような人たちをいかに幅広く地域内でやっていくか。

そういうことをすることが、若い人たちも含めて、自分も夢とロマンに満ちあふれた農村づくりになるんじゃないかなという気がしております。

○ 梅と栗から、エノキを中心とした施設型の展開へと切りかえていかれるわけですが、その過程でいろんな検討をされたんだと思うのです。そういった点について、選んでいく過程で切り捨てていったものの条件なり、あるいはエノキに集中していく、そのあたりをもう少しご説明していただければと思います。

矢幡 昭和36年に一番最初にスタートしたときに、うちの町で、牛と明治生まれと六尺棒を追放しようという運動をしました。昭和36年の明治生まれといたら、当時はまだ若かったと思うのですけれども、うちは純農村ですから、農家の方々は、牛が1頭や2頭みんないました。ところが、V字型の谷間でございまして、わずかばかりの農作業のために、牛を飼育するのは不合理過ぎるということで、牛を追放いたしました。

六尺棒を肩に担ぐ。そんな重労働を村の中からなくしてしまおう。軽労働の仕事に徹底的に切りかえようという発想で行ってまいりました。そして梅と栗に絞ってまいりました。これが、やはり年に一作、非常に天候に左右されて不安定ということで、その中から梅や栗で鍛えられた若い農家の方々が、待てよと……。

流通がかなりわかるようになってきて、ちょっと違った視点から、物づくりをしようというような機運が、農家の方に出てきました。一貫して、軽薄短小の商品づくりをやってまいりました。10キロ単位で物を売るようなものは、うちの町ではやめよう。1キロ単位で売るのは——梅や栗は1キロ単位で売るんです。これも梅と栗だけにしよう。できるだけ軽薄短小の100グラム単位、50グラム単位、あるいはグラムは関係のないような物づくりの方向でいこうということで、一貫

してやってまいりました。今は何と130種類ぐらいの物が、農協を通じて販売をされていると思います。

うちの町に、日本全国からいろいろな方々が視察に見えます。集荷場が4カ所ございます。午前11時から午後3時ごろまでの間、軽のトラックで女性の方々が運転して、農産物を持てきます。みんな本当に軽い物ばかりです。来た方々が、あの方たちは、本当に農業をしているんですかと聞きます。農業をしていないような格好で農業をする、そういう方向づけを私たちもしてきたつもりです。

今、いろんな新しい取り組みをしている若い人たちもいますけれども、うちの場合は、一貫して軽薄短小、高付加価値ということをやっております。

それからもう一つ、これだけの農業をやっていますと、どうしても2等品、3等品の商品が出てまいります。それを付加価値を高めようということで、加工ということが当然話題に上がってまいります。

うちの町も、14年前から加工を始めました。これは日本じゅう、どこでも加工を考えるわけですが、実際、自分たちがやることになると、大変難しい問題があります。既に既存の大手のそういうものもありますし、つくる技術者はだれなのか、それを管理する方はだれなのか、経営をする人はだれなのか。あるいはそれを売る、流通をする人はだれなのかということになると「言うは易し行うは難し」の加工でございまして。

始めたのは、僕らが第1回でイスラエルに派遣した青年です。予定の日々が過ぎても、帰ってこないような悪坊主の若い者でしたけれども、そういう男たちが加工事業を始めまして、何と3年目には、1人で2億円の農産物加工品を売るようなことをしました。今は、十数億の加工場になっておりまして、いろんな何十種類かの商品がつくられております。昨年からは、うちの町でできるそういう農産

物をもとにしまして、和菓子をつくっております。

これは、どんな和菓子屋さんよりも、うちの町は有利だと思っています。というのは、果樹で旬なもの、最高の時期のものをお菓子にあしらうことができて、つくっても、つくっても足りないような状況でございます。

私は、今常々思うのですが、農村でやれる仕事が多に多い。あれもしたい、これもしたい、したい仕事がいっぱいあります。農村ですれば、さまになります。自分たちが、流通のこと、日本国内の動き、世界の動き、あるいはいろんなすてきな情報、そういうものをしっかり身につけて取りかかれば、私は、今ほど日本の農村がおもしろい時期はないという気がしております。

○ 先ほど矢幡さんの話で、矢幡さんの表現をかりますと、イスラエルのキブツに行くと、頭をぶん殴られるような感じをされたと言われたのですが、キブツを選んだ考えと、そこで受けたカルチャーショックは、一体どういうものであったのかということ、その辺をちょっと……。

矢幡 実にはイスラエルのキブツに行く前に、僕は3年前にヨルダンからレバノンを通り、エジプトに行く機会を得まして、空の上から、あの中近東を眺めました。赤茶けた砂漠の上から、かすかに黄色くなって、緑が延々と広がっている。スチュワードに「あれは何だ」と言ったら、あの緑の始まりからがイスラエルという国だという話を聞きました。エジプトに入りましたら、本当に砂漠でして、そのことが頭から離れませんでした。

帰ってまいりまして、私はおやじにその話をしました。そうしたら、イスラエルにキブツという集団があって、この前の戦争の後、独立をして、今は砂漠の中に見事な農園を切り開いていっている。石ころばかりの荒地地に砂を持ってきて、石の間に砂を入れて、そこにミカンやブドウやそういうものを入れて、

水をやりながら育てていっているという話を聞きました。ちょうどうちの町が梅と栗で村づくりをして、なかなか思うように進まなかったときだったもので、そういう姿をぜひ参考にしようということで、イスラエルというものが飛び込んでまいりました。

2番目のイスラエルのショックの問題ですけども、20年前、私が行きましたときに、物質的な面では、キブツよりも我々の生活の方が豊かであったと思います。ただ、生活の質の深さという点から見たら、到底及ばないなという気がしました。

特に労働時間が9時から午後3時で終わるんですけども、3時からあと、その時間の使い方。今、日本人も、暇の問題、豊かさと感じるためには、ゆとりの時間が今叫ばれ始めましたけれども、ゆとりの時間ができたときに、その時間をどういう過ごし方をするかということが、私は、ある面では人間の価値を問われるんじゃないかなという気がいたします。

20年前、うちの町の方々に、そういう時間ができたら、何に時間を費やすだろうか。多分焼酎を飲むか、パチンコ屋に行くか、どうせろくなことには時間を使わない。しかも僕らが滞在中に、何と農業をやっているその集団の方々が、1カ月に1回はフィルハーモニーのオーケストラを呼んで、音楽会を開くんです。私が行っているときにも、ちょうどカラヤンが来まして、僕は、カラヤン指揮で、目の前で彼のオーケストラを聞くことができました。びっくりしました。

人間が多いとか少ないとか、東京ならばこんなことができる、地方ならできないということはどうぞございまして、僕も、姉妹町を調印するときに、イスラエル在住の日本人の方々に当たりまして、フェスティバルをやるから何か催しをやってください。柔道を教えるにきている方、生け花をやっている方、いろんな方を僕は訪ね歩きました。

その中のある1人に、テルアビブのフィルハーモニーオーケストラのバイオリニストがいました。僕は、そこに何度も訪ねたのですが、何と人口30万のテルアビブの町に、二つのフィルハーモニーのオーケストラの劇場がございまして、金曜の日没から土曜日にかけては毎週休みですけれども、あとは365日ぶっ続けです。人口30万のテルアビブに二つのシアトルがあって、フィルハーモニーをやっています。2週間前でないと、切符が買えません。そのくらい文化に対するレベルが高い。

僕は、きょう時間がなかったので言えませんでしたけれども、これからの農村づくりの

中で、避けて通れない大事な過程は、僕らは、物づくりだけでは付加価値をつけることはできない。これからは物の後ろに、私たちは地域のいろんな文化を大事にしないことには、物は売れていかない。それも本当に質の高い文化を……。

僕の地域は、昔から貧乏な地域でした。伝統的な、すてきな文化は本当に残っていません。しかし、何も悔やむことはないと思っています。じゃ、僕らの手で、今からつくればいいと思っています。この文化を避けては、私たちは、すてきな地域づくりはできないと考えております。